

## 序章

ラグビーのワールドカップがやってきた

東北のちいさな街がラグビーで沸いた。

夏の潮風にはためくカラフルな大漁旗。さざ波のごとく流れる歓声。オレンジ色のはまゆり。群青色の海。台風の間東接近も、釜石の空は晴れ渡っていた。光る白い雲と澄んだ青空。

2019年7月27日の土曜日。正午過ぎ、気温は33度を超えた。岩手県釜石市の釜石鵜住居復興スタジアムで、日本代表が強豪のフィジー代表と対戦した。試合前、ラグビーワールドカップ日本大会招致の立役者、元内閣総理大臣の森喜朗さんもりよろろう（元日本ラグビーフットボール協会会長、東京オリピック・パラリンピック組織委員会会長）がメインスタンドにやってきた。

大会本番は目前。ワールドカップ釜石開催に尽力された82歳は好々爺のごとき、やわらかい表情を浮かべ、まぶしそうに緑のグラウンドを見つめた。東日本大震災の復興のシンボルとなるスタジアムでの初のテストマッチ（国別代表戦）。感想を聞けば、さらに相好を崩し、「よかつたなあ」としみじみと漏らした。

「そう、よかつたなあという感じだよ。（震災による津波の影響で）何もなくなつたところに来た時、ほんとうにここで（ワールドカップを）やるのになつて思つたものだ」

午後2時50分、試合が始まった。赤白ジャージの日本代表の勇者たちは、黒色ジャージの南太平洋諸島のアイランダーにフィジカル勝負を挑み、34―21で快勝してみせた。激しいぶつかり合いに両チームの選手が芝の上に何度も倒れた。

両チームの選手たちはベストを尽くした。からだを張った。試合後、あたたかいファンの声援の



大漁旗が揺れる釜石鵜住居復興スタジアム

中、両者のジャージは入り乱れ、互いに握手をし、胸を合わせ、健闘を讃え合っていた。これぞ、ラグビーの美徳だろう。

——ラグビーには「ノーサイド」という言葉がある。ベストを尽くし戦い終えた瞬間、敵味方の区別がなくなり、ひとつの人間愛に包まれてゆく。それがもつとも崇高なラグビーの精神。

2019年4月某日。神奈川県・葉山マリーナそばにある海沿いの白色の地中海風レストラン。2015年のラグビーワールドカップで活躍した五郎丸歩選手ごろうまるあゆむがこんなことを言っていた。日本代表はその大会の初戦で優勝候補の南アフリカに劇的な逆転勝利を収めた。日本の選手たちはピッチで跳びはねて喜んだ。

「実は非常に反省した部分があったんです」と、五郎丸選手は4年前の出来事を思い出した。

「南アフリカの選手はすごく悔しかったと思います。でも、彼らは笑顔で、僕らの勝利を讃えてくれたんです。僕らは

試合に勝ったかもしれないけど、スポーツという観点でいえば、南アフリカに負けてしまったのか  
なってるんです」

勝負の結果、ふたつのチームの人間の愛情とリスペクトによって、得もいわれぬ感動の極致につ  
つまれて終わる。それがスポーツの醍醐味であり、スポーツのチカラなのである。

ラグビーはいい。そのラグビーの世界一を決めるワールドカップが日本で開催される。これって、  
オリンピック、サッカーのワールドカップと並ぶ、「世界三大スポーツイベント」のひとつなのだ。  
世界で延べ約42億人がテレビ観戦するビッグ・イベントなのである。

幸運にも、ラグビーワールドカップは1987年の第1回大会（ニュージーランド・豪州）から2  
015年の第8回大会（イングランド）まですべて、夏季オリンピック大会では1988年のソウ  
ル五輪から2016年リオデジャネイロ五輪まですべて、サッカーワールドカップは2002年日  
韓大会を現場で取材してきた。この3つのうち、ラグビーワールドカップが一番、オモシロいと思  
っている。その大会がアジアで初めて、ここ日本で開かれる。自分のつぶれた耳（俗称…ギョウザ  
耳）をぎゅつと引つ張ってみる。夢じゃないよね、これって。

### ワン・フォア・オール精神

まず、ラグビーってどんなスポーツなのだろう。40年ほど前、こんなことがあった。九州は福岡

の修猷館高校に入学した時だった。僕ら新入生はバカでかい体育館に集められた。運動部の入部勧誘説明会だった。

おっさんみたいな3年生のラグビー部員が壇上で焦げ茶色の皮の楕円球を右手で持ち上げた。

「これ、何のボールか知つとうや？」

このボールは人生たい。このボールは青春を豊かにしてくれる。人生同様、右に左に転んでいく。楕円球を通じ、友だちの輪が広がっていく。たしか、そんなことをのたまったあと、ラグビー部の先輩はこう、おごそかに言葉を発したのだ。

「ノーサイドたい。ラグビーは、人と人の垣根をとっばらうたい。楽しかせえ」

だまされた。ラグビー部に入ったのが運の尽きだった。あまい高校ライフとは決別し、修行僧のごとき青春をおくった。砂場のような校庭でビフテキ（重度の擦り傷）をつくり、早稲田大学では星空を見ながらグラウンド周りをぐるぐる回った。たしか「人工衛星」と呼んでいた。つらかったけれど、確かに友だちはヤマほどできた。世界が広がった。

ラグビーボールは、サッカーボールと違って、楕円球だ。大昔、ブタのぼうこうに皮を巻いてボールにしていたそうだ。ポンと蹴ると、どこに転ぶかわからない。だから、オモシロい。でも、実は練習の量で転がりは大分、予想できるようなものだが。

ラグビーは自由だ。サッカーと違い、手でボールを持って、どこに走ってもOKなのだ。基本は4つ。「ラン」「コンタクト」「キック」「パス」。これを自由に選択できる。

大事なルールはボールを前に投げてはいけないこと、ボールを前に落としてはいけないことだ。だから、チームで大事に大事にボールをつないでいかないといけない。パスでは、生卵を手渡しするように大切につないでいく。心をつなぐ。ひとりでも欠けると、ボールはうまくつながらない。だから、ラグビーには仲間はずれ、おちこぼれ選手はいない。みんなでボールをつないで得点する。仲間を信じ、大事にするチームスポーツなのだ。

からだの小さい選手も大きな選手も、でぶちゃんものつぼさんも、いろんな体型の選手が適材適所で活躍できる。そんなチームスポーツ、「ワン・フォア・オール、オール・フォア・ワン」なのだ。

ディフェンスでの武器はタックルだ。ラグビーの魂なのだ。ぶつかって相手をバシッと仰向けに倒す。勇気と体力と技術が求められる。危なくないかって？ そりゃ練習しないと危ないが、ちゃんとからだを鍛えておけば大丈夫だ。

ランニングプレーは驚きの連続、スピード感にあふれている。が、試合のポイントは、なによりコンタクトプレーだろう。スクラムとブレイクダウン。8人でかたまりとなって組むスクラム、タックルしたあとのボール争奪戦、ごちゃごちゃとなるブレイクダウンの優劣をみれば、チームの強弱がわかる。

## 幾多の故人の夢を乗せて

スポーツは歴史である。歴史をたどれば、ラグビーのワールドカップ日本開催を夢見ていた、何人かの故人を思い出す。

例えば、2003年11月、イラクで凶弾に倒れた外交官の奥克彦おくかつひこさん（享年45）。早大ラグビー部の憧れの先輩だった。秩父宮ラグビー場そばの古い居酒屋で人生を教えてもらったことがある。

その奥克彦さんがラグビーワールドカップの日本開催を口にし、早大ラグビー部の先輩にあたる総理大臣（当時）森喜朗さんに日本招致を熱く訴えたのだ。情熱は人を動かす。その思いは紆余曲折を経て、日本ラグビー協会会長（当時）の町井徹郎まちいてつおさん（2004年没、享年69）を動かし、会長を継いだ森さん自身が招致活動の先頭に立つことになった。これも運命である。

日本ラグビー界は2005年、ラグビーワールドカップ2011年大会の招致に失敗する。日本など新興国の理事の1票に対し、伝統国には2人の理事がいて2票を持つという理不尽な理事会の投票方式に屈した。オリンピックを主催する国際オリンピック委員会（IOC）や国際サッカー連盟（FIFA）とは違うのだった。

国際ラグビー評議会（International Rugby Board：IRB、2014年よりワールドラグビー＝WR）のシド・ミラー会長（当時）に対し、森さんはこう、抗議したそうだ。「ラグビーのオモシロさはボールを展開することではないか。日本にもボールを回してくれ」と。

日本ラグビーはワールドカップ招致に再チャレンジする。経験は宝である。招致失敗を糧とし、

理事たちとの信頼関係が強まり、いわゆる「ロビー活動」も戦略的になる。2016年東京オリンピック・パラリンピック招致活動もプラスに作用した。

ここで妙案が生まれた。ワールドカップの2015年大会と2019年大会を一緒に決めようというアイデアである。日本の単独開催案だけでは、どうしても理事たちが日本の観客動員や収支に不安を抱き、ラグビー伝統国・協会に勝つのは難しい。そこでラグビーの母国、イングランドとタッグを組んでの「ウルトラC」のセット開催案だった。日本は総力をかけて運動し、2009年7月28日、ついに2019年大会の招致に成功した。

たしかに日本でのワールドカップ開催を危ぶむ声は世界の一部にくすぶり続けた。だが2015年のワールドカップ大会で日本が南アフリカに番狂わせを演じるなど大活躍し、国際ラグビー界の嫌な空気を一掃してくれた。

訃報が続く。ミスター・ラグビー<sup>①</sup>といわれたワールドカップ2019組織委員会の事務総長特別補佐だった平尾誠二<sup>ひらのおせいじ</sup>さん（享年53）は2016年10月、病気で天国のフィールドに召された。平尾さんは生前、僕にこう、語ったことがある。

「この大会は、新しいラグビー文化の構築につながっていく。もしかしたら、最後のもっとも大きなチャンスかもしれない。これをビッグステップと思って、さらなる発展につなげていくための大会にしないといけない」

ラグビーが大好きだった釜石市の佐藤蓮晟<sup>れんせい</sup>くんも2017年2月、天国に旅立った。まだ13歳だ

った。目を閉じれば、地元でのワールドカップを楽しみにしていた少年の笑顔がよみがえる。

彼はこう、僕に言った。

「おれは、いろんな人とラグビーを楽しみたい。おじさん、ワールドカップでもっと、日本のラグビーを盛り上げてよ」

## 日本代表の挑戦

さあ、ワールドカップだ。2015年の大会で、日本代表は優勝候補の南アフリカ相手に番狂わせを演じた。あの「お祈りポーズ」の五郎丸歩選手がヒーローとなった。3勝1敗。でも、目標だったベスト8に進出することはできなかった。

2019年大会に向けた日本代表のヘッドコーチは、元ニュージーランド代表で元日本代表だったジェイミー・ジョセフという気のいいおじさんだ。ニュージーランド出身のリーチ・マイケル主将は「大会のターゲットはベスト8以上」と明言している。

そうだ。ラグビーのワールドカップの出場規定には国籍条項はない。ある一定の条件を満たせば、外国籍の選手も日本代表として出場できる。日本代表は前回の2015年大会で31人中10人が外国出身の選手だった。ダイバーシティ（多様性）がラグビーの魅力のひとつでもある。

五郎丸選手はもう、日本代表には入っていない。代わって、天賦の才を授かった南アフリカ出身の松島幸太郎（サントリー）、スピードのある福岡堅樹（パナソニック）、強靱な足腰を持つ姫野和樹

## 2 熊本復活ストーリー

野口光太郎

(熊本県ラグビーフットボール  
協会理事長)

### 震災を乗り越えて

あの春、私たちは震災のコワさとラグビーの底力を知った。

2016（平成28）年4月14日の木曜日。私は夕食後にリビングでくつろぎながらテレビを見ていた。ラグビーワールドカップ・リミテッド（RWC L）による2回目の視察が終了し、視察団を福岡に見送った翌日のことであった。

午後9時26分、突然ガラス窓が揺れだし、次の瞬間、携帯電話から汽笛のような鈍いブザー音が3回鳴り「地震です、地震です」と何度も繰り返した。テレビからも地震を知らせるチャイム音が鳴りだし、家中が騒然となった。揺れはだんだんひどくなり、横揺れではなく縦にシェイクされるように突き上げられた。

私は「早く収まってくれ」と願いながら、目の前のテレビと、壁に飾ってあった絵画を押さえ、「ほら来たぞー」と思わず叫んだ。強い揺れが一旦収まるのを待つて女房と庭に出て、身の安全を

# 1 ノーサイド

## ああ、愛しのノーサイド精神

ノーサイド精神というコトバをご存じか。ラグビーというスポーツの美德のひとつ、試合後の敵味方なし、永遠の友情を示す文化のことである。

2015年、僕は南アフリカ（南ア）戦勝利の3日後の夜、ロンドンのパブで友だち2人とビールを飲んだ。店の奥のテーブルに座っていた。そのパブに大きなからだの南アのサポーター数人が入ってきた。みな、濃い緑色の南アのレプリカジャージを着こんでいた。

「まずい」。そう、思った。僕は少し緊張した。南アのサポーターの敗戦ショックは想像に難くない。僕は目立たないように歩き、カウンター越しにビールのお代わりを注文した。が、南アのサポーターに見つかった。

「日本人か？」

「そうだよ」

短い英語のやりとりがあった。何事もなく、僕はビールグラス片手にテーブルに戻った。その5分後だった。緑色の南アジャージの2人が、3人分のビールを持って僕らのところにやってきた。

### 3 リスペクト

#### 選手へのリスペクト

つらい会見だった。2018年5月22日、東京・日本記者クラブで開かれた日本大学アメリカンフットボール部の宮川泰介選手の記者会見である。無数のフラッシュがたかれる中、黒いスーツ姿の20歳は深々と頭を下げた。

会場には約300人のメディアが押し掛けていた。それほどまでに社会問題となった悪質プレーだが、いち学生が顔と名前を出して登壇せざるをえないとは。日大の対応のまずさはともかく、大学におけるスポーツ指導に携わる人のあり方が問われることにもなった。

「ご自身にとって、監督、コーチに信頼はありましたか？」と問われると、宮川選手は数秒の沈黙のあと、言葉を絞り出した。

「井上（奨）コーチに関しては、自分が高校2年生の時から監督をやっていたので、その頃から信頼はしていたのかもしれないです。内田（正人）監督については、そもそも、お話をする機会が本当にないので、信頼関係……というものは、わかりません」

宮川選手は5月6日の関西学院大との定期戦で、関学大の選手に悪質なタックルをし負傷退場さ

## あとがき

邂逅こそ、人生の宝である。人との交わりが人生を彩り、豊かにしてくれる。ラグビーを通し、縁が結びつくことで、運がまわってくる。運があるからこそ、さらに良き縁に恵まれるのだ。

スポーツ、とくにラグビーによって、僕は生かされてきた。多くの知人、友人にも恵まれた。ラグビー会場に行けば、懐かしい人に「あれ、マツセさん」と声をかけられることもある。

序章に書いた通り、2019年7月27日、僕は東北のちいさな街、岩手県釜石市に行った。ラグビーのテストマッチ、日本代表×フイジー代表を取材するためだった。元内閣総理大臣の森喜朗さんの話を聞くためだった。

試合後、取材を終え、スタジアムから帰る途中、ある人にバツタリ、会った。懐しい、はにかむような笑み。元新日鐵釜石ラグビー部でプレーしていた佐藤大輔さとうだいすけさんだった。数年前の夏、早稲田大大学院の論文研究の質的調査（インタビュー調査）を通して、知り会った。元気な長男がいた。当時、小学6年生の蓮れんせい晟くんだった。

親子そろっての人懐っこい笑顔が印象的で、不思議な人間の大きさを感じさせる少年だった。ラグビーが大好きな少年だった。彼はラグビーの魅力、ラグビーの持つ価値を愛していた。他者へのリスパクト、犠牲的精神、フェアネス、団結、インテグリティ……。

彼とラグビーワールドカップのことを話したこともある。蓮晟くんは言った。

「新しいスタジアムはどんな人でも楽しめる場所になればいいと思う。プレーする人にとっても、観戦する人にとっても、気持ちいい環境であってほしい。ラグビーだけじゃなく、サッカーなど、ほかのいろんなスポーツの人と一緒に何かをすれば、盛り上がるような気がするんだ」

蓮晟くんは小学1年生の時、ラグビーを始めた。地元の釜石シーウェイブスジュニアでがんばり、チームの中心選手として活躍した。ラグビーを通して友だちをいっぱいつくった。

2011年東日本大震災では友だちを亡くした。悲しい別離、喪失感。それでも、やさしく、たくましく育っていった。12年、14年と、台湾の子どもたちとのラグビー交流にも参加した。「台湾遠せい」と題する当時の感想文にはこう、書いた。

〈台湾のラグビーチームの子どもたちと友だちをつくりました〉

蓮晟くんは友だちづくりの天才だった。なのに突然、病魔に襲われた。左足を切断。車いすで地元釜石の甲子中学に通った。ラグビー部はなかったため、友だちに誘われて野球部にはいった。一生懸命、練習を手伝い、スコアブックもつけた。生来の献身性もまた、ラグビーの美德のひとつであらう。

2017年2月、蓮晟くんは天国に召された。まだ13歳だった。釜石での告別式においては、た

## 松瀬 学 (まつせ・まなぶ)

1960年、長崎県生まれ。福岡・修猷館高校、早稲田大学ではラグビー部に所属。83年、共同通信社に入社。運動部記者として、プロ野球、大相撲、オリンピックなどの取材を担当。96年から4年間はニューヨーク勤務。02年に同社退社後、ノンフィクション作家に。人物モノ、五輪モノを得意とする。RWCは1987年の第一回大会からすべての大会を取材。日本文藝家協会会員。元RWC組織委員会広報戦略長、現・日本体育大学准教授。著書は『汚れた金メダル——中国ドーピング疑惑を追う』（文藝春秋）『なぜ東京五輪招致は成功したのか』（扶桑社）、『東京農場——坂本多旦いのちの都づくり』（論創社）など多数。

## ノーサイドに乾杯！——ラグビーのチカラを信じて

---

2019年9月10日 初版第1刷印刷

2019年9月20日 初版第1刷発行

著者 松瀬 学

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル（〒101-0051）

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／株式会社グーツフィールド

---

ISBN978-4-8460-1872-6 ©2019 *Matsuse Manabu*, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。